

漆芸「変り塗」技術とコンピュータグラフィックの融合化研究

小林 伸好
KOBAYASHI Nobuyoshi

Though nature in the city is disappearing every year, we are not always sensitive to this change. Specially, the sound of nature is apt to be forget, and it is not recorded and reserved usually. However, we can feel the excellence of nature only by the whole five sense, and the environment of the urban space must improved not only by the sense of sight. In this paper, urban sound of nature is apt to be forget, and it is not recorded and reserved usually. However, we can feel the excellence of nature only by the whole five sense, and the sound of nature is apt to be forget, and it is not recorded and reserved usually. However, we can feel the excellence of nature only by the whole five sense, and the sound of nature is apt to be forget, and it is not recorded and reserved usually. However, we can feel the excellence of nature only by the whole five sense, and the sound of nature is apt to be forget, and it is not recorded and reserved usually. However, we can feel the excellence of nature only by the whole five sense, and the environment of Yamagata city is studied from the view point of soundscape of the rivers.

1. はじめに

漆芸技術に於て「変り塗」(かわりぬり)の分野は技術者、研究者が少なく、種類の多い変り塗技術(数百種類以上あると言われる)を明確に記したものは少ない。また、作品や試作手板等実物として表現されたものも少なく、資料が殆ど無いのが現状である。

数年前から筆者は変り塗技術の研究と試作手板、200種類以上を制作しているため、本研究では制作した変り塗手板のデータベース化と、コンピュータによる色彩、模様、デザインの展開を図り、現代生活にねざした変り塗デザインの基礎とするものである。

2. 変り塗

「変り塗」は刀の鞘の装飾として塗られていた「鞘塗」がその基礎となっていると云われる。江戸時代、登城の際に使用された黒塗りの鞘と異なり、私的な場所では装飾的、個性的な替鞘が盛んに使われ、素材、技術等さまざまな技法が試みられた。これらの「鞘塗」は数百種類に及んだと云われるが基本技法は数十種類に分類できる。また、金属粉(金粉、銀粉)を使用した蒔絵技術、貝(アワビ貝、メキシコ貝、夜光貝など)を使用した螺鈿技術と似た技法も多いが基本的に地紋風パターンを表現したものを「鞘塗」「変り塗」と呼ぶことが多い。鞘塗の技術は幕末から明治にかけての各国で開催された万国博覧

会に各産地から製品化された塗り物として数多く出品され、高い評価を受けた。歴史的資料としては加賀前田家五代藩主綱記(1643～1724)が編集した「百工比照」(紙・木・革染色・金属・漆など工芸素材の技術を集めた見本手板)の中の手板見本が残っている。

変り塗産地としては青森県津軽塗(写真1)、福井県若狭塗が有名で生産高も多い。両産地共に歴史が古く、現在でも多くの職人が仕事を続けている。津軽塗の代表的技法の「唐塗」は漆のみで表現する変り塗に対し、若狭塗は螺鈿や卵殻など漆以外の素材を取り入れた変り塗である。本県には変り塗技術として荘内地方の「磯草塗り」(写真2)「竹塗り」があるが全国的知名度は低く、小規模で、職人の数も激減している。しかし、「磯草塗り」「竹塗り」の両技法は変り塗技術としてはこの地域にしかない独特な技法であり、貴重なものである。

3. 変り塗技術

変り塗技術は使われる素材や制作される技法から数種類に分類される。沢口悟一著による「日本漆工の研究」では変り塗の分類として(絞漆を基本とするもの)(錆び漆を基本とするもの)(植物の種、実、葉を使用するもの)(研出法に拠るもの)(吸上げ法を応用するもの)(型紙を用いるもの)(烙印を用いるもの)(粉蒔きを為すもの)(卵殻および貝殻を用いるもの)(錫金貝を用いるもの)(花塗の変り塗)が紹介されている。これらの技術は漆のみで制作するものと他素材を使って表現する変り塗に大別できる。変り塗で重要になるのは漆のみで表現されるものも他素材を使い表現するものも変り塗作品の仕掛けと呼ばれる基本パターンを作ることにある。この出来



写真1 古作津軽塗



写真2 磯草塗り



写真3 仕掛け



写真4 変り塗



写真5 変り塗



写真6 変り塗

上がった基本パターンの上にさまざまな色漆を塗り重ね、研ぎ出し、完成させる技法が変り塗と呼ばれる。漆以外の素材を使う場合は素材の持っている形状によってパターンが決定される事が多いが、絞漆で表現する場合はパターン作りの道具の工夫で無限とも言えるパターンを創作することが可能である。古来、職人の工夫によりさまざまなパターン創りの道具が開発されたと云われるが基本となる道具は刷毛と木製ヘラであった。今回の漆手板は漆のみで表現したものであり、パターン表現の道具としては刷毛、ヘラ、紐、新聞紙、サランラップ、ゴム等、伝統的道具だけでなく現代に開発されたさまざまな素材を使用してパターン制作をしている。

絞漆を基本とした変り塗の工程を示すと

- 1—下地工程が終わった漆手板に絞漆（黒呂色漆に卵白、豆腐などの蛋白質を入れ、粘度を上げた粘りの強い漆）によりさまざまなパターンを制作する。（写真3）
- 2—絞漆の乾燥後に色漆を数回、塗り重ねる。
- 3—色漆乾燥後、砥石やサンドペーパー、炭で模様を研ぎ出す。
- 4—研ぎ出した面に漆を吸い込ませ、漆面に艶をつけて完成させる。（写真4～6）

工程は上記のとおりであるが絞漆や色漆は環境の違いや季節による温度、湿度変化によって漆の乾燥状況が微妙に変化するため作家の経験と感が重要な要素となる。

特に絞漆の乾燥には注意を要する。パターンを創るために絞漆を厚く施すため、漆の乾燥が早いと「ちぢみ」と呼ばれる漆表面が皺になる現象がおきる。「ちぢみ」がおきると仕上げパターンが予定どおりに表現できなくなり、仕上げ表面にも凹凸が現れ、昔から製品にならないと云われている。

4. 変り塗とコンピュータ

基本工程の中の仕掛け漆によるパターン表現と色漆による色彩構成は作品、製品を制作する上で重要な要素となる。また、パターン表現と色彩は最終表面塗装として作品、製品のイメージを決定する要因となっている。この二つの工程は従来、実際の試作手板を何十種類と制作し、パターンの大小、形、色漆の明度、彩度の再現性を考慮し、作品、製品の形体とともに検討されている。実際に作業を進める場合、同種のパターン数枚を手板制作し、色変りのバリエーションを行う場合とパターン変化の手板数枚を制作し、色が同じ手板を制作する場合がある。これら全体の手板枚数は数十枚となり、試作手板完成まではひじょうに手間と時間がかかる作業である。他の素材でものを作り上げるには同様な実験、試作等の作業があると思われるが特に漆素材を扱う場合は漆の乾燥時間や素材コストの面で手間がかかるのが現状である。

変り塗におけるパターンと色漆の仕上り完成予想はコ



基本手板



写真7 パターン変換



写真8 パターン変換



写真9 色変換



写真10 色変換

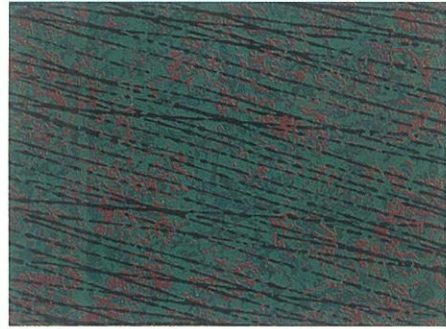


写真11 色変換

コンピュータを利用（グラフィックソフトでの画像処理）することにより短時間でさまざまなバリエーションを作ることが可能である。パターンそのものをコンピュータ上で制作することも出来るが、変り塗の行程上（実際に制作可能な仕掛けパターンを作る事）、基本パターンは手作業により作るほうが現実的である。コンピュータで制作したパターンは道具や漆の特性上実現できるとは限らない事が多い。基本パターンが出来上がればスキャナーおよび、写真により画像として取り込み、若干の修正、パターン変更を行う。（写真7～8）また、仕上げられた変り塗手板の色彩に関しては同じくスキャナーにより画像として取り込み、色変換を行い、数十種類の（写真9～10）手板画像として制作する。このような画像処理はグラフィック、染色系デザイナー達には数年前からコンピュータが利用され、実際の製品、作品として完成されている。

このような漆技術の中の変り塗の分野では地紋風パターンを加飾として使用するためコンピュータの利用が容易になる。パターンと漆の色彩の変換で今まで何十種類も試作をしていたものが基本塗装数種類に減らすことができコンピュータ上で様々な変換、完成予想をすることができる。作品、製品の形体と共にコンピュータでより現実生のある塗りを目で確認することが出来、時間も短縮できる。

今回、制作した変り塗手板は写真データとして漆芸塗装室内のコンピュータに保存している。（写真12～13）



変り塗手板



変り塗手板



変り塗手板



写真12 変り塗データ

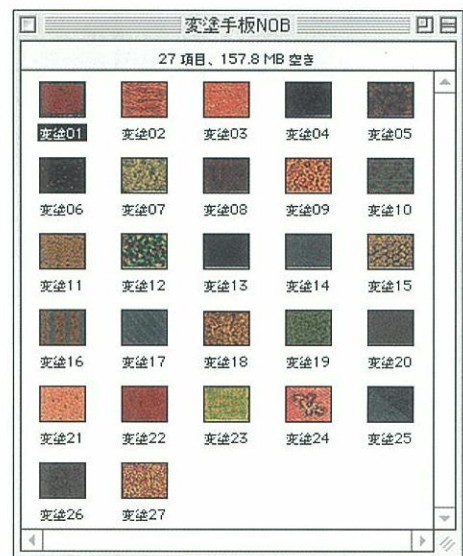


写真13 変り塗データ

これらの変り塗資料は授業等でも使用し、また、学生も自由に開いて活用している。また、これらの資料を基本データとしてホームページでも変り塗の解説とともに公開の準備を進めている。(写真14~17)

5. 今後の課題

コンピュータによるパターンや色変換は簡単な操作で実現できるようになったがコンピュータ上で作成された画像を実際の作品に仕上げて行く事は依然として作家自身が造るか職人の手に委ねることになる。コンピュータによる画像変換は無限に制作でき一見便利のように感じるが漆の作業として実際の作品に置変えて行くときにはコンピュータ上で制作した変り塗が必ずしも実現できるとは限らない場合が多く、先にも述べたように漆の技術では漆の乾燥条件によるパターンの再現や色漆の明度、彩度の色再現という点でコンピュータ上で構成されたものと同一になることはほとんど無い。しかし、コンピュータを刷毛やヘラのような道具の延長線上あるものとして捉え、伝統的な漆の世界でもコンピュータでしか出来ない新しい可能性のあるデザインが今後、開発されてゆく必要があるように感じる。

参考資料・文献

- 日本漆工の研究 沢口悟一 美術出版社
 津軽塗 青森県教育委員会
 津軽塗 弘前市博物館
 漆芸品の鑑賞基礎知識 小松大秀/加藤寛



写真14 ホームページトップ

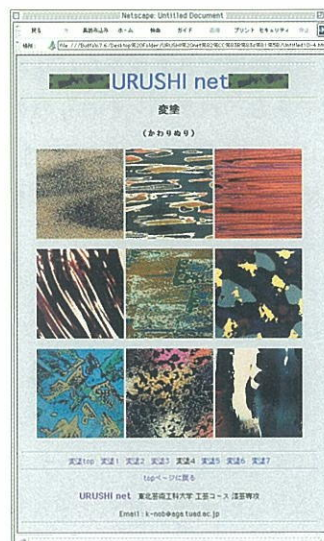


写真15 変り塗ページ

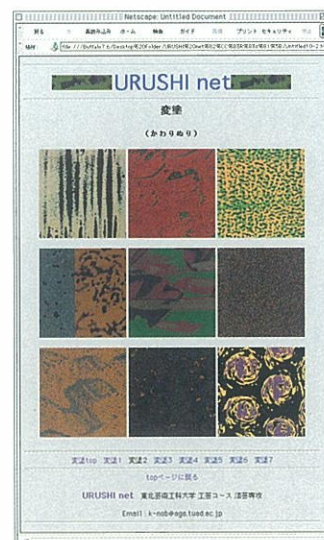


写真16 変り塗ページ

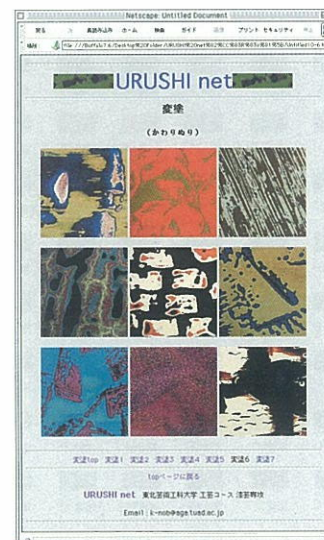


写真17 変り塗ページ



変り塗 「青い花器」



変り塗 「白い器」